



大人のR/Cカー講座 vol.1

少年の日の
あの興奮をもう一度。

text: Takashi Koga/Jun e Co.
photographs: Takashi Shimizu
styling: Junichi Nakase/shadow

RARI
NO
Edition Extra 1974



ミニッツレーサーMR-01シリーズの「フェラーリ246GTディノ」。風を表現したといわれる曲線を再現した。ボディカラーの赤はフェラーリが採用するロツ・コルサと同色というこだわりようだ。価格1万6590円。



ミニッツオーバーランドシリーズの「ボルシェ カイエン ターボ」。専用のSUVシャシーを採用しているため、凸凹道での走行も可能なサスペンション構造を持っている。最大登坂能力はなんと45度。価格1万6590円。

ミニッツは欲張りな商品だ。「ミニカー」と「R/Cカー」という男の子には欠かせなかったオモチャを融合させているのだから。空想の世界へと誘ってくれたミニカーは、男の子なら一度は触れたことがあるだろう。思い起こしてみれば、面白いことに、クルマなら何でもイイというワケではなかった。自分なりに好きなクルマがあつて、それを手で思い通りに走らせていた。友だち同士でレースをしてみたり、刑事ドラマ張りのスタントをしてみたり、男の子が最初に体験するバーチャルリアリティの世界なのかもしれない。男の子にとってR/Cカーは、初めて「リアル」に操縦するクルマ。速く走らせるために、操縦テクニックを学んだり、メカニズムに興味を持つたりしたことが懐かしい。ミニッツは、幼少時代のドキメキをそのままに蘇らせてくれる。自分の愛車と同じミニッツを買ってもよし、自分の憧れのクルマを買ってもよし。観賞用としても十分に

楽しめるクオリティを誇るミニッツは、大人を久しぶりに自由な空想の世界へと誘い出してくれる。書齋にミニッツを置けば、そこはガレージへと変わるのだ。しかし、ミニッツは単なるオブジェではない。R/Cカーとしての性能にも優れ、室内を驚くほどの速さで駆け抜ける。アクセルや操舵は操縦者の微妙な調整に応えるもので、手のひらサイズながらも本格派。ノーマルでは飽き足りない人のために、チューニングパーツも用意されている。ホイール（なんと本物のアルミ削り出しである）、サスペンション、デフなど、その幅広さは実車さながら。京商によれば「実は最初にミニッツに注目したのは、コアなR/Cカーファン」だったという。事実、このファンたちによるレースが世界規模で開催されるほどの人気を集めているのだ。どこまでハマるかは、アナタ次第。欲張りなミニッツは、欲張りなユーザーをも満足させてくれる。

KYOSHOミニッツシリーズについてさらに詳しく知りたい方は、<http://www.mini-z.jp>または<http://www.kyosho.co.jp>まで。抽選でミニッツが当たるプレゼントキャンペーンも実施中です。